

イカれた金剛石はバニーガール先輩の夢を見ない。

リン オクムラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2011年その時、時は加速していく。そして、全てが終わったあと。ある男が全く元いた世界と全く違う場所に、受精卵のレベルまで体が若返ってしまった状態で、別の世界にぶっ飛ばされた。

2015年、日本。K県に位置する場所。そこにある男がいた！
我々は知っている。このリーゼントを。これはこのK県の藤沢で起こる奇妙な出来事の話。

目次

第3話	第2話	第1話
9	4	1

第1話

グレートだぜ、こいつぁーよ」

そう一人ボヤいた。少年の名前は梓川咲太という。この世界では『そういうことになっている』。では、この世界でなければどうなるだろうか。そう、彼の名は、本当の名は『東方仗助』であった。

そのひと昔前の不良の様なリーゼントは『前』となんら変わらないものであった。

「仕事行ったら、いきなり周りのものがすげースピードで腐ったりぶっ壊れたりしたと思ったら、気がついたら赤ん坊になっていた。何行ってんのかわかんねえーだろオーがよオーおれにも何が何だかわカンねえ。ただわかるのはこれが『夢』なんてチャチなもんじゃあなく、紛れも無い『現実』ってことだ」

と、彼は後にそう語った。誰かのスタンドによる攻撃だろうか、そういうえば承太郎さんがアメリカでなんかやってるとかなんとかいつてたよーなど仗助は振り返る。

と、前置きはそこまでにして、なぜ『梓川咲太』改め、『東方仗助』がこうも面食らっているのかというと、超至近距離にバニーガールがいたからだ。そう、バニーガール。普通なら仗助はこの程度では驚かない。その状況に驚いた。ここがカジノだとかキャバクラだとか『そういうところ』なら彼はそう驚かなかっただろう。

しかし、彼がいる場所は違う。ここは図書館だった。

「問題はこの原因が『どれ』かってことだ」

周りはバニーガールに気がついていなかった。そのバニーガールの正体は国民的な元天才子役にして、元女優、そして仗助が今通う学校の一つ上の上級生『桜島麻衣』だった。そして、彼女は自分の姿が周りに見えてないことに気づいているのだろう。だからあんな格好でうろついているのだろう。それにしたってバニーガールを選ぶとは、クレイジーなやつだなと仗助は正直ちよつと引いた。

考えられる可能性はいくつかある。

第一に目の前の桜島麻衣がスタンド攻撃を受けた『被害者』である

こと。

第二に桜島麻衣が自分のスタンドを制御できてない『スタンド使い』であること。

第三に最近なにかと噂が多い『思春期症候群』と呼ばれる都市伝説が原因であること。

「静ん時の静みてーに自分のスタンドを制御出来てねーなら、ちよつとあぶねーよなあー。まあ被害者でもおんなじことなただけだよー」

もう17年は会えていない、血の繋がらない妹は生まれながらのスタンド使いだった。彼女のスタンド絡みでバスと競争したりしたのは今となってはいい思い出である。

「さーて、どオーすつかなあ」

「あら、まだ私のこと見える人がいたのね。それじゃ」

「おいおいおい、ちよつと待てよ!？」

「何？」

「アンタ桜島先輩だろオ？おれの一個上の学年よオ」

「あなた、峰ヶ原高校の生徒なのね？そういえば一昔前の不良みたいな格好してる生徒がいるって聞いたことがあったけどあなたなのね？」

と、仗助の頭を向けつつ、そう言う。

「おれは『梓川咲太』。ここじゃあ『そういうこと』になってるみてえっス」

「私は桜島麻衣よ。まあ、知ってるみたいだけど。今日見たことは誰にも言わない方が賢明よ。頭のおかしい人に思われてしまうわよ」

そう言っつて踵を返して桜島麻衣は立ち去ろうとする。

「あー、ちよつと待ってくれよ先輩。今から帰ろうつてのを止めようつてわけじゃあねえ。ほんのちよつと数秒だけ、たった数秒しかかからねえカンタンなことだぜ。ただ『質問』に答えてくれるだけでいいんだ。ただ個人的に知りたいだけなんだよあんたが『どっち』なのかをよオ〜…」

ゴゴゴゴと空気が重くなる。その時、ある一つの共通点を持つもの

だけにわかる変化が起こった。

ドギヤアンという擬音が似合うような勢いで出てきたソレ。名を『クレイジー・ダイヤモンド』。梓川咲太…東方仗助のスタンドである。スタンドとはパワーのあるビジョン、生命エネルギーが具現化したもの。それぞれに何かしらの能力があり、彼のスタンドは『治す』能力である。

そして、スタンド使いにはルールがある。そのうちの一つ、スタンド使いにしか、スタンドを視認できないというもの。

「なあ、あんた、おれの後ろにいる『コイツ』が見えるかい？」
「何を言ってるの…？何も見えないわよ」

本気で何を言ってるのかわからない、と言った感じの彼女に、ものは試しということで『クレイジー・ダイヤモンド』で寸止めするように殴りかかった。しかしながらその焦点は全くと言っていいほど『クレイジー・ダイヤモンド』にあっていない。

「…なら、いいんだ。あんたがどっちか分かったしよオ」

「もういいかしら。それじゃあね」

「もし」

最後に仗助は麻衣に向けて言葉を掛ける。

「もし、あんたが助けを求めるんならよオ、別に俺は『協力』してもいいぜ。あんたのそれを調べればおれは『帰れる』かもしれないよオ。おんなじ学校にいるんだし、なんかあったら声かけてくださいいっす」

と、だけ声をかけた。

第2話

朝、妹を起こしていつものように学校へ向かう。なんだかんだ二度目の高校生活であるが一度目よりも平和に過ごせてはいた。そして、いつものように途中であつた国見祐真とダベリながら学校へ向かっていくのだ。

「国見よオ、桜島先輩って」

「残念だったな咲太」

「べつに先輩に告白したってわけじゃあねえよ。ただあそこにいる先輩、『見えてる』か」

「そりゃあな。急にどうした？」

「いや、見えてるってんなら別に問題はねえ」

そうやってダベリながら、登校いつもの如く授業をテキストに聞き流し、国見やもう一人の友人である双葉理央と共に喋りながら帰る。

そして、帰りの駅で桜島麻衣を見かける。しかし、その時彼女は周りの野次馬に盗撮されていた。

「ねえ、あれ」

「やつぱりそうだよなあ？」

別に、麻衣を助けようとかそんな気はなかった。単純にそういう行為がムカついただけ。いつもならテキストに流して終わり。しかしながら、顔見知りがそういう目に遭っているのを放っておくっていうのもなんとなく仗助の中に後味の良くないものを感じる。ただそれだけ。

「芸能人ってのも大変だよなあ。別に仕事してるわけじゃあない時にもこうやって撮られるんだからよ」

そう言いながら盗撮してる男に割り込む。

「なんだよお前」

「あ？おれは別にここに立っただけだけだぜえ？盗撮してるあんたと違ってよオ」

「なっ、ち、ちがつ」

「ガキじゃあねえんだからそういうコトはやらねえ方がいいんじゃないか。今の時代はよオコそういう行動はいつ火種になってもおかしくねえぜ」

仗助がまだ一度目の高校生だった時はまだ、スマホみたいなものはなかったが、今の時代はそういう行為で炎上するSNSがよくある。仗助自身はスマホは持っていないからイマイチピンとこないが、話自体はよく聞く。

そして、凶星を突かれたからか、逆上した男はある禁句を仗助に向かって言った。

「う、うるせえ！お前みたいな頭にハンバーグ乗っけてるみたいなヤツに言われたくねえんだよ！」

「おい、あんた。今おれの頭のことなんつた？」

そしてプツンとキレた仗助の出来上がりである。

「おれの頭がサザエさんみてえだとオ？」

「な、そこまで言っつてな」

「確かに聞いたぞコラー！ツ！！」

そして、無意識にスタンドの腕で男を殴り飛ばした。

「ギヤアアア！！」

「おれの頭にケチつけてバカにしてムカつかせたヤツあ何モンであろうと許さねえ！」

「ひいひいっ」

「待ちやがれテメエツ！！」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさいひいひいひい!!?」

「ドラララララララッドラアッ」

「アダパアツツツツ!!?」

そして、逃げようとする男に向かってさらに追撃を喰らわせる仗助。歳を食ってそれなりに精神的に大人になったかと思いきや、地雷を踏まれたときにプツンするのはいつになっても変わらないらしい。『まだ怒りたりねえぞコラー！ツ』と更なる追撃を喰らわされる。

(なんなのアレ…人が勝手に吹き飛んだ…?)

しかし、スタンド使いではない麻衣からすると仗助がキレたあといきなり人がブツ飛んだようにしか見えなかった。

(しかも何でかしら？傷が治っていつてる…？いえ、きっと目の錯覚ね…。自分が『異常』な状態だからってそうそうこんな非現実的なことが起こるわけがないわ)

そして、仗助の『治す』能力で即座に顔面の傷は『治され』る。ただし、仗助がブツツンしてるせいか、その顔は男の元々の顔の造形とは違ったものになってしまった。しかしながらこの『治す』能力のおかげか仗助が停学以上の罰則を食らうことは無かった。ようは傷が残ってないから問題として大きく取り上げられないのだ。仗助自身はそこまで考えてなく、ただ単にブチギレている中で無意識に能力を使っているだけである。

因みにその後、男はキレ続ける仗助からなんとか逃げたあと、変わり果てた顔が原因で破局したらしい。

「ありがとう。…ちよつとやりすぎな気もするけど」

「お、おう？」

「何？『余計なことしないで』とでも言われるかと思っただ？」

「正直なあ。先輩はそういうの素直に言うようなタイプじゃねえってかよオクなんつーか露伴のヤロウほどとはいかねえけどちよつと『近い』気がするからなあ」

いきなり認識されねーからってバニーガールガール姿で現れたりするブツ飛んだとことかも露伴にちよいと似てるよなあ。とか思ってたたりする。正直な話、仗助自身はこの先輩とうまくやっていくって言うことが想像できなかつた。

「それにおれも頭にして途中から何も考えずにただあのヤロウを殴ることだけ考えてたからなあクなんつーかシヤクゼンとしねえって言うかよ、そんな妙な感じがするんスよ」

「側から見てても凄まじいまでの怒りっぷりだったわね」

「…この髪型はよオー。昔、本当に昔におれを助けてくれた人がしてた髪型なんスよ。おれはあの人にあこがれて同じ髪型にしてんだ。だからこそ、それをけなすヤツは許せねえ。この髪型をけなすってこ

とはあの人のコトもけなすっつーことだからな」

桜島麻衣は、少しだけ『梓川咲太』に対しての見方を変えた。不良っぽい見た目の割には正義感に厚く。そう、見た目と髪型をけなされたときにプツンするところ以外には学校内で大した問題を起こさない、いやその二つ以外に問題がないごく普通の生徒だったから。80年代の不良のような見た目をしているがその実そこまで悪い人ではないのではと。見た目で勘違いさせてるのはわかっているはずだけど、そこを直さないあたり、その恩人に対してのリスクは側から見るとよりよっぽど大きいんじゃないかと、麻衣は思った。

「で、先輩はこんな微妙な時間に何してたんスか？学校が終わってから結構時間経ってるっスよね」

「君にばったり合わないように時間潰してたの。無駄だったみたいだけど」

「べつに先輩に会おうとしておれはこんな時間まで待ってたわけじゃあないぜ。フツーに国見や双葉とダベってたらこんな時間になっただんだよなあ」

億泰や康一とはまた違った性格をしてる二人だし、別に『スタンド』を使えるわけでも、一緒に闘いを乗り越えたわけでも、事件を解決したわけでもない。ただ単に気が合うダチっただけの二人だがこの世界に於いて数少ない『信頼』できる友人であった。いつか億泰や康一をあいつらと合わせてみたいとも仗助は思っている。億泰は見た目は仗助と同じで厳ついし、康一は平凡な感じであるが二人とも頼りになるいいヤツなのだ。

「友達いたんだ」

「そりゃいるに決まってるだろ！おれのことなんだと思ってるんスか!？」

「不良よ」

ぐうの音も出ない正論である。

「確かにこの見た目だしよオク避けられるっつーのはよくあるっスけどそれでもツルんでくれるダチっつーのは割といるもんっスよ」
「そう…」

その時、麻依の携帯から着信音が鳴る。仗助自身はよく知らないがどこからのアイドルグループが歌ってる歌っぽいというのはなんとなくわかった。複数人の女性の声が歌からは聞こえるからである。スマホの着信画面の『マネージャー』の文字を見た瞬間麻衣は『拒否』というボタンを押した。

「出なくていいんすか？」

「もう電車来たし…あの人の用の件はわかってる」

そして、二人は電車の中に入っていった。

第3話

『前』の世界の2011年、空条承太郎が昏睡状態に陥った。それを救う手がかりとして東方仗助はとある一冊のノートの復元を頼まれた。承太郎がその時何に巻き込まれたとかそういうことはよくはわからなかった。『DIO』の残したノートの復元にしか仗助は関わらなかったからだ。

その後、世界は加速し、一巡し、そして……。東方仗助は全く別の『誰か』である『梓川咲太』として『生まれたことになっていった』。

仗助自身には何が起こったのかよくわかっていなかった。しかし、自分は戻らなくてはならないと思っっている。こちらにも大切なものや放つて置いてはならないものもある。『妹』の『かえで』のこととかどうにかしなければならぬ問題がいくつかあることにはある。それが全て終わったら、何もかもが解決したなら、自分は帰らなくてはならない。思春期症候群と呼ばれる『病気』の『症状』には色々なものがあった。ともすればスタンドと同じように多種多様である。だとするならば、『思春期症候群』を使うことで『前』の世界に戻ることはできないだろうか、と『梓川咲太』は考えている。『妹』の時に色々調べた中には一人の人間が複数の思春期症候群の『症状』を『発症』した例もあった。

(思春期症候群の『発動条件』と『狙った効果』がわかればよおそれを使って帰ることができるかもしれないねえ。じじいのこともあるし早いとこ向こうに戻る条件を探さなきゃあならねえ。『思春期』症候群つーぐれえだから、もしかしたら『発症』に『年齢制限』があるかもしれないねーからなあ)

実のところ、仗助が積極的に桜島麻衣の思春期症候群に関わろうとした理由がそこにあったのだ。麻衣を『調べる』ことによってその『症状』と『発症条件』を知るためである。

『今日は『認識』されてるみてーっスね、先輩。前はよおれ以外の人間にはまるで風景に溶けこんでるかのよう、そこに有っても有るよーうに感じねえ言っちゃまえば幽霊みてーに誰にも『認識』されてなかつ

たつてのに」

「……」

麻衣は言葉を発さない。

「ただこの『現象』は先輩が操れるってワケじゃあないみてーだな。操れるってーならよ。あんな図書館の中でバニーガール姿でうろつきみてーなクレイジーな行動したりだとか、盗撮された時に『認識』できねーようにしちまえばいい話なんだからよオク。ま、先輩に『そういう』シユミがあつたりしたなら別の話なんだがなあ」

「な!?!そんな趣味わたしは持ってないわよ!?!」

甚だ不名誉だつていう顔をしながら、仗助に食つてかかるように否定する麻衣。仕方ないと言つた顔をしながら『現象』について話す。

「なんとなく気まぐれで江の島の水族館に行ったの。でも、家族連れで賑わっている水族館の中で、誰も私を見ていないことに気がついたのでよ。いつもなら見られるどころか声をかけられて魚を見るどころじゃないのに」

仗助は黙つて聞いている。そこから麻衣の表情が険しくなつていった。

「それで帰りがけに喫茶店に入った瞬間ハッキリした。『いらつしやいませ』の声もかけられないし、席にも案内されないもの。びっくりして急いで藤沢まで帰ってきたらみんな普通にわたしを見てた。江の島でのことは気のせいじゃないかって思ったんだけど、やっぱり気になつて調べ回つてたの」

「…それでバニーガールっスか」

「あの格好なら見えてたら見るでしょ。気のせいを疑う余地もなく。まあ見えてても全く騒がない誰かさんのことに気づくのはちよつと時間がかかつたけど」

あの時、仗助は麻衣に対して頭がちよつとオカシイヤツなんじゃないかなとか結構失礼なことを考えていた。何しろ仗助の周りにいた杜王町の連中は一癖も二癖もある連中ばかりだったから。

「つまりよオ、先輩のソレはタイミングとかそういうのじゃあなく『場所』が問題つてワケなんだな」

「みたいね。今なら世界中から見えないんじゃないかって期待したんだけど、学校では普通だったし今もね」

「フツウのヤツなら慌ててどーにかしようとするところだけどよオ、先輩なんか楽しんでないっすか？まるで子供が新しいゲームやスポーツを始める時におっかなびつくりしながらも楽しんでやってるときみてーに」

「そりゃあ楽しいもの。今までずっと人に見られて、人の目を気にしながら生きてきた。いつも思ってたのよ誰もわたしのことを知らない世界に行ってみたいって」

それは言ってしまうえば未練や執着といったもの。それは芸能人だからこそ持っているもの。子供の頃から誰かに見られることが当たり前だった麻衣だからこそ感じるものである。

「私は今の状況に『満足』しているの。わかったでしょ？私がどれだけイカれた女か。……もう関わらないで」

キツパリとそう言って桜島麻衣は電車から降りていった。

（おいおいおい〜ツ！あんなにキツパリ助けはいらなかつたのにな、これはちよつとカツコ悪いんじゃないやあねーの？）

咲太：もとい仗助も降りる駅が同じではあるため降りて、ここであの先輩に会ったら気まずいよなあ〜とかそういうことを考えていた。しかし…

「クリームパンを一つください」

シーーンとその売店のおばちゃんは何も動かない。ピタアアとその場所に立ち続けてどこかを見ている。

「あの、クリームパンを一つください」

（確か先輩はこの前『藤沢駅』では認識されたつってたよなあ〜。じゃあなんで今は『認識』されてねーんだ？もしかしてこの『症状』にはまだ『続き』があるのか？癌とかがほつとくと全身に転移していくみてーに『症状』は今、この瞬間にも『進行』してるってーことかあ？）

それにしてもどーすつかかなコレとも仗助は考えている。帰るとき

どっちにしろ売店の前を通るから助けても、無視しても気まずいのは変わりない。

「ま、しゃーねえか」

そうして、仗助は麻衣の真横に立つ。

「おばちゃん！クリームパン一つもらってもいいっすか？」

「あいよ！クリームパン一つね！」

そして、仗助はクリームパンの包みをもらった後麻衣に渡す。

「困ったことがねえとは言っていたがよオ、本当はちよつとばかり困ってたりするんじゃないか先輩？」

「そうね。この店のクリームパンが食べられないのは少し困ったわ。でも、信じるのこんなイカれた話」

「信じるのも何もおれは『こういうの』には慣れてるからなあ」

仗助が『梓川咲太』になってから、この世界で思春期症候群と呼ばれるモノに関わるのはこれで2回目であった。それに杜王町ではこういう不思議な出来事がよく起こったのだ。あの街はちよつとばかり『スタンド』を持つてる奴が多かったからだ。

「先輩のそれはよ多分都市伝説でよく言われてる『思春期症候群』だぜ。『スタンド』かもしれないとも思ったがよオ、あんたはあの時『見えて』なかったからなあ」

まあ、スタンド使いからの攻撃を受けている可能性も考えられるが、仗助が今のところスタンドの姿を影もカタチも見えないことから、可能性としては思春期症候群の方がまだ圧倒的に高いと思っっている。

「思春期症候群なんて、よくある都市伝説じゃない。根拠なんてないもない。というかスタンドってなによう？」

「根拠はあるぜ」

「!？」

「だから、ちよつと付き合ってくれねえか先輩。『思春期症候群』が『存在』するっつー『根拠』を説明してやっからよオ。ついでにスタンドについても教えてやるぜえ」